

次郎物語(二部)

下村湖人



じろうものがたり
次郎物語 (二部)

ポプラ社文庫 A56

¥ 450

著者 しもむら こじん
下村 湖人



検印省略

1980年2月 第1刷©

発行者 久保田忠夫

発行所 東京都新宿区須賀町5
〒160 振替東京4-149271

株式会社
ポプラ社

印刷所 新興印刷製本株式会社 製本所 大和製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

次郎物語(二部)

下村湖人

日本財団支援

笹川良一記念文庫

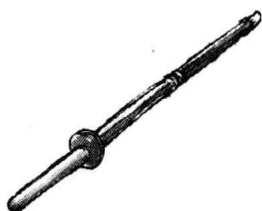
財団法人日本科学協会

ポプラ社文庫 A56

目次

一	それから
二	万年筆 まんねんぴつ
三	大きな笑 え くぼ
四	寝言 ねごと
五	外科手術 げかしゅじゅつ
六	卑怯者 ひきょうもの
七	枕時計 まくらどけい
八	蟻 あり にさされた芋虫 いもむし
九	靴 くつ
一〇	すぎ焼 や き
一一	蘭 らん の画 え
一二	考える彼

一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---



三がま口

一七

四ふみにじられた帽子ぼうし

一八

五親爺おやじ

一九

六はがき

二〇

七小刀ナイフ

二六

八転機てんき

二三

九夜の奇蹟きせき

二四

一〇朝の奇蹟きせき

二五

あとがき

二六

解説
年譜

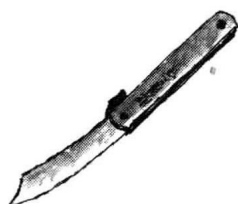
群馬大学名誉教授

永杉 喜輔

二七

装幀
さし絵

ヒサクニヒコ



一 それから

母に死別してからの次郎の生活は、見ちがえるほどしつとりとおちついていた。彼は、なるほど、はたから見るとさびしそうではあった。彼の目の底に焼きつけられた母の顔が、何かにつけ、食卓や、壁や、黒板や、また時としては、空を飛ぶ雲の中にさえあらわれて、ともすると、彼の気持ちを周囲の人たちから、引きはなしがちだったのである。しかし、母が、臨終の数日まえに、

「あたしは、乳母やよりもっと遠いところから、きつと次郎を見ててあげるよ。だから、……だから、腹が立ったり、……悲しかったりしても……」

と息をとぎらせながら言った言葉が、いつも力強

く彼の心をとらえていた。で、彼自身としては、彼が孤独に見える時ほど、かえって気持ちがおちついていたとも言えるのだった。

彼は、正木のお祖母さんといっしょに、よくお墓詣りをした。お墓の前にしゃがむと、彼は拝むというよりは、じつと目をすえて地の底を見とおそうとするかのようにであった。彼は、母の死体が日ごとにくずれて行っているなどとは、微塵も思いたくなかった。彼が地下数間のところに想像するものは、いつも、ほのかな光の中に、浮き出した大理石像のようなものだった。この大理石像は、お墓詣りがたびかさなるにつれて、いよいよ鮮明になって行つた。しかも、不思議なことには、その顔は、彼の記憶に残っている母の顔そのままでのものではなかった。それは、もっと美しい、神々しい顔だった。ややふし

目に半眼にひらいた目つきには、どこかに観音さまを思わせるものさえあった。

次郎は、学校の綴り方の時間に、このごろ感じたことを何でもいいから書け、と先生に言われて、「地下に眠る母」という題で、お墓詣りのおりのこうした感じを、そのまま書いて出した。すると、そのつぎの綴り方の時間には、先生は、みんなの前でそれを朗読したあと、黒板の横の壁にピンではり出した。題の上には三重園が朱で大きく書いてあり、文末には、

「先生も思わず静かな気持ちにさそいこまれてしまいました。君の孝心がこの名文を書かせたものと思います。」

と記してあった。

次郎は、しかし、先生が朗読をはじめた瞬間、後

悔に似た感じにおそわれた。ひとりで大事にしまっておいたものを、だしぬけに人に見つかったような気がしてならなかったのである。彼は最初顔をまっかにした。が、朗読が終わるころには、むしろ青ざめていた。そして、休み時間になって、みんなが黒板のそばにおしよせた時には、飛びこんで行ってそれを引っぱがしたいような気にさえた。

次郎にとつては、彼の記憶に残っているじつさいの母の顔と、墓詣りをするうちに描き出した母の顔とは、決してべつべつものではなかった。彼自身では、母の顔を二様に思い浮かべているとは、ほとんど意識していなかったほど、まったく自然に、時におうじて、そのどちらかが彼の目に浮かんで来たのである。彼が、彼なりに社会を持っている場合、つまり、学校や、家庭や、その外の場所で、周囲の人



たちと何かの交渉がある場合に、自然に彼が思い出すのは、彼の記憶に残っているじっさいの母の顔であり、仏壇の前にすわったり、墓詣りをしたり、夜中にふと目をさましたりする時に、ひとりでに浮かんで来るのは、観音さまに似た母の顔だった。

もつとも、月日がたつにつれて、このふたつの顔は、次郎のその時の気分しだいで、どちらになることもあった。そして、三四か月もたったころには、彼は自分でも気づかないうちに、観音さまに似た顔ばかりを思い出すようになっていたのである。

彼は、乳母のお浜におりおり手紙を書くことを忘れなかった。お墓詣りをした時には、はがきぐらいはきまって出した。また、綴り方の時間に「地下に眠る母」を書いて出したのを後悔していたにもかかわらず、お浜には、三重園のついたその綴り方をそ

のまま送ってやり、教室で先生に朗読^{ろうどく}してもらったことまで書きそえてやった。

お浜に手紙を書く時の彼の気持ちはきわめて自由だった。彼は、彼自身のことについてはむろんのこと、彼の周囲のことについても、町の本田^{ほんだ}一家のことについても、彼の知っていることなら、何でも書いていいような気がしていた。もっとも、実際に書いたのは、たいていはお浜がよろこびそうなことばかりだった。本田のお祖母^{おばあ}さんについては、ただいちどだけ、「お祖母さんは、まだ僕をあまり好きでないようだが、僕はもうちっとも困らない」と書いたきりだった。

これは、しかし、いやなことをつとめてさけようとする彼の心づかいからではなかった。お浜へあてた手紙を書き出すと、彼は、ちょうどあまい果物に

でもしゃぶりついているような気になって、自然、不愉快^{ふゆかい}なことを書く気がしなかったのである。

むろん、墓詣りをしたおりの彼の手紙には、母の追憶^{ついおく}やら、墓場の光景^{けいけい}やら、それにともなう彼自身の感傷^{かんしやう}やらが、かならず何行かは書きこまれてあった。しかも、時としては、彼はそのために誇張^{こちやう}とか思えないような文句まで考え出すのだった。これは、しかし、彼の母への思慕^{しぼ}の不純^{ふじゆん}さを示すものだとは言えなかった。彼は、まだ、思いきりお浜にあまえてみたい気持ちだったのである。母への思慕^{しぼ}を濃厚^{のうこう}に表わすことが、今では、お浜への思慕^{しぼ}を濃厚に表わすことであり、彼はそうすることによってのみ、ぞんぶんにお浜にあまえているような気持ちになることができたのである。

次郎にとって、何の自制心^{じせいしん}も警戒心^{けいけいしん}も必要としな

いまだ一人の相手、うそであろうと、誇張であろうと、そのままにうけ入れてくれるただ一人の相手、そして、かりに腹を立てあうとしても、腹を立てあうことそのことが、愛のしるしでさえあるようなただ一人の相手、それは今でもお浜だけであるということ、読者はやはり忘れてはならない。

ところで、次郎は不思議にも、お浜自身に対する彼の思慕を、彼の手紙の中に、あからさまに書いたことなど、いちどだってなかった。彼は、お浜自身にかんしては、いつも手紙の末には、「乳母や、では、たっしやでお暮らさない。」と書くだけだった。そのほかに、もし彼のお浜に対する深い愛情を示す直接の言葉を求めるとすれば、おそらく、母の葬式後別れてからの最初の手紙に、「僕が大きくなるまでじょうぶにしてください。」と書いたのだけで

あったろう。これもしかし、何も不思議なことではなかった。というのは、次郎のお浜に対する思慕は、次郎にとってはあまりにも自然であり、それを意識的に言い表わす必要など、彼は少しも感じていなかったからである。

お浜からの返事は、いつも簡単だった。たいていは郵便はがきに、まず手紙を受け取ったお札を書き、そのあとに、勉強して一番になってもらいたいとか、おとなしくせよとか、病気をするとか、お墓詣りを怠るなとか、いったような意味のことを、きまり文句でしるしてあるにすぎなかった。たまには、まるで返事さえ来ないこともあった。次郎は、それを物たりなく感じながらも、少しも不服には思わなかった。というのは、彼は、お浜が字が書けなくて、いつもだれかに代筆させていることをよく知ってい

たからである。

もつとも彼は、その代筆者をたぶんお鶴だろうと想像していた。そしてもしそうだとすると、もつと何とか書きようがありそうなものだ、お鶴はもう僕のことを忘れてしまっているのだろうか、などと考えたりした。

彼は、母を思うとすぐお浜を思い出し、お浜を思うときつと母を思い起こした。彼が二人からうけた印象は、色も匂いもまるでちがったものではあつたが、それは彼にとって決して調和しがたいものではなかつた。それどころか、彼は、いわば、高く澄みきつた暁の星を、咲きさかるれんげ畑の中からでもあおぐような気持ちで、二人の思い出にひたることのできたのである。暁の星とれんげ畑とは、もはや彼にとって同時に必要なものになっていた。暁の星

だけでは、清澄にすぎてさびしかったし、れんげ畑だけでは、何かしら心の奥に物たりなさを感じられた。彼は、この二つを同時に持つことによって、緊張感と幸福感とを共に味わいつつ、無意識のうちに、自身の魂を、永遠と現実との二本の軌道の上に、正しく転じはじめていたのである。

むろん、彼の周囲には正木一家のひとびとがいて、あたたかく彼を見まもってくれた。正木のお祖父さんは、やはり懐しくもこわくも思われる人だった。お祖母さんは母の死後いよいよやさしくなってきた。墓詣りのたびごとに、母の思い出を語り、ついでお浜のことを言い出して次郎をなくさめるのは、いつもこのお祖母さんだった。次郎は、しかし、母の死後、この二人が目立って元気がなくなつたように見えて、何となくさびしかった。

藏^{かんざう}夫婦や、從兄弟^{いとこ}たちには、べつに変わったところもなかった。どちらかと言うと、次郎自身が、彼らに対して不必要に氣をつかったり、小細工^{こさいく}をしたりしなくなっただけに、彼らの次郎に対する態度にも、いっそうこだわりがなくなつて來たと言えたであらう。

ともかくも、こうして、次郎は正木一家のひとつびとに取りかこまれ、しばしば、お浜に手紙を書き、自由に母の追憶にふけてゐるかぎり、たいして不幸な生活を送つてゐるとは言えなかつたのである。

もつとも、竜一^{りゅういち}の姉の春子が、いよいよ正式に縁づくことになり、母の死後まもなく、東京に發つて行つてしまつたと聞いた時には、腹も立たたし、悲しくも思つた。このまえ彼女が東京に行つて、いったん歸つて來た時に、すぐにもたずねたいと思つたが、

そのころは母が危篤^{きとく}で、学校も休んでいたし、いよいよ葬式^{そうしき}がすんで学校へかよえるようになってからも、忌中^{きちゆう}におめでた前の人の家をたずねるものではないと、正木のひとつびとに言いきかされていたので、とうとう会えないでしまつたのが、とりわけ心残りではなかつた。しかし、それも母の死という大打撃^{だいげき}のあとだつたせいか、このまえ春子が東京に行くと聞いた時にくらべると、不思議なほど、心に受けた痛みが軽かつた。そして、時がたつにつれて、学校で竜一の顔を見ても、めつたに春子のことを思い出さなくなり、たまに思い出しても、それは、春子の東京土産^{みやげ}にもらつたガラス製のライオンとともに、むしろあまい追憶のひとつになりにかけて來たのである。

ただ、彼の心にもいつも暗い影になつてこびりつい

ていたのは、やはり本田のお祖母さんだった。彼は、

もう一人でも町に行けるようになっていたので、行きたいとさえ思えば、土曜ごとに泊まりがけで行けるのだったが、実際に行くのは、せいぜい月一回ぐらいのものだった。それも、自分から進んで出かけようとしたことなど、ほとんどなく、たいていは、正木の老人たちにつれられたり、あるいはすすめられたりして、しぶしぶ出かけるといったふうだった。

それも、しかし、本田のお祖母さんの彼に対する仕打ちが、以前よりいっそうひどくなって来ている以上、無理もないことだった。本田のお祖母さんは、このごろでは、次郎をまるで本田の子供だとは思っていないかのようにあしらった。小学校を出たあと本田に帰って来られては迷惑だ、と言わぬばかりの口吻をもらしたことも、いちどならずあった。ある

時など俊亮にむかって、

「この子もやはり中学校に出す気なのかえ」とか、「正木でお世話ついでに何とか考えてもらったら、どうだえ」とか、次郎を目の前において、平気でそんなことを言ったことさえあった。

俊亮は、むろんそれには取りあわなかったが、次郎としては、将来の希望を打ちくだかれたような気がして、その時は正木に帰ってから、ながいこと暗い気持ちになっていた。

何よりも、次郎を不愉快にしたのは、お祖母さんが彼にむかって、正木の人たちのことを何かと悪く言うことだった。しかも、その悪口は、どうかすると、亡くなった母の上にまで飛んで行くのだった。「親の気位が高いと、自然その娘も気位が高くなるものでね。このお祖母さんは、お前たちのおかあさん

でどれほど苦勞したか知れやしないよ。」

これが、何かにつけ、お祖母さんの言いたがることだった。また、

「気がきつくて、素直でないところは、次郎がおかあさんそっくりだよ。恭一きやういちなんかおかあさんにはちつとも似ていないがね。」

などとも言った。これには、はたで聞いていた恭一も、いやな顔をした。次郎はなおさらいやだった。自分が悪く言われるのは、なれっこになつていて、もうさほどには腹も立たなかったが、彼にとつて神聖なものになりきっている母が少しでも傷きずつけられることは、何としてもたえがたいことだった。

彼は、しかし齒がみをしてそれをこらえた。こらえなければ、いっそう母が悪者になるような気がしたのである。

彼が本田に行きたがらない理由は、正木一家にも、むろん、よくわかつていた。で、正木のお祖父さんは、最近しばしば俊亮しゅんりやうにそのことを話して、次郎が中学校へ入学したあとの始末しまつについて、じゅうぶん考えてもらうことにした。しかし、俊亮はその話になると、いつもため息をつくだけだった。

寄宿舎きよくしやに入れる手もあり、また、少しは無理でも正木の家から自転車でかよわせるという方法も考えられないではなかったが、いずれにせよ、近くに自家ぢかがあるのにそんなことをしては、ますます次郎をひがましてしまうのではないか、という心配が俊亮にはあった。じつは、次郎本人が知ったら、そのほうをどのくらい望んだか知れなかったのだが、俊亮としては、そのことについて次郎の気持ちを知りてみることさえ、よくないことのように思われるのだっ

た。それに、商売のほうも、ふなれたために、とにかく手
ちがいだらけであり、次郎のために特別の支出でも
することになれば、それこそお祖母さんがだまっ
てはいまいし、正木からかよわせることにすればその
ほうの心配はないとしても、世間の思わくというも
のを、元来がんらいそんなことにはわりあい無頓着むとんちゃくな俊亮も、
さすがに無視するわけにはいかなかったのである。

(いっそ養子ようしにでもやってしまおうか。)

俊亮は、ふとそんなことを考えてみたこともあつ
た。しかし、それは、彼の良心、——というよりは、
彼の次郎に対する愛情がゆるさなかった。

彼は、次郎を見ると、このごろ涙もろくさえなっ
ていたのである。

この問題は、じつを言うと、お民の葬式そうしきがすむと
すぐから、ないないだれの気にもかかっていただけ

で、法事ほうじのたびごとに、ひそひそとささやかれてい
たのだが、四十九日がすぎ、百か日がすぎ、その年
も暮れ近くになって、やっと正木の老人から俊亮に
話し出したのだった。

それでも、けっきょく、解決がつかないままに年
があけてしまったのである。

二 万 年 筆

「次郎、とうさんは、きょう正木へ行く用ができた
んだが、いっしょに行かないか。」

朝飯をすまして、火鉢ひばちのはたで、手紙の封ふうを切っ
ていた俊亮が、だしぬけに言った。

次郎は正月を迎えるために本田に帰って来ていた
が、むろん、一日だってお祖母さんに不愉快ふげきな思い

をさせられない日はなかった。恭一や俊三しゅんぞうといっしょに、父といちど映画館につれて行ってもらったばかりに、正月らしい気分は何一つ味わえず、とりわけ、食卓での差別待遇さつべつたいぐが、母にわかれてからの彼のしみじみとした気持ちを、めちやくちやにしそうだった。で、休みはまだあと二日ほど残っていたが、父にそう言われると、彼は飛び立つようにうれしかった。「すぐ行くの？ 僕、じゃあ、カバンを取って来るよ。」

彼は、そう言って、二階へかけあがった。

「だしぬけに、どうしたんだね。」

と、まだちゃぶ台のそばで茶を飲んでいたお祖母さんが、不機嫌ふきげんそうに、俊亮にたずねた。

「いや、歳暮くれにも無沙汰まさたをしていますし、どうせいちど行って来なければなりませんまい。」

「でも、今年はまだ忌いがあるんじゃないのかい。」
「そりゃそうです。しかし、べつに年始ねんしというわけではありませんから。」

「じゃあ、松の内でも過ぎてからにしたほうが、よくはないのかい。あんまり物を知らないように思われても、何だから。」

俊亮は苦笑くしやうした。そして、ちょっと何か考えていたが、

「じつは、今、正木から至急しきゅうの手紙が来ましてね。」

と、膝ひざの前にかさねておいた四五通の手紙に目をやった。

「何を言っただ来たのだえ。」

お祖母さんは、いそいでちゃぶ台のそばをはなれ、不機嫌と好奇心とをいっしょにしたような目つきをして、俊亮の火鉢ひばちの前にすわった。

「きょうの夕刻までに、ぜひ来てくれというんです」

「そんな急な用件って、何だね」

「それは、行ってみないと、はっきりしませんが

……」

「何とも書いてはないのかい」

「ええ……」

俊亮の返事は少しあいまいだった。

「用件も書かないで、人を呼びつけるなんて、ずい

ぶん失礼だとは思わないのかい」

俊亮はまた苦笑しながら、

「親類仲でそうこだわることもありますまい。それに、こちらのことを気にかけてのことらしいのですから」

「こちらのこと？　すると何かい、こちらのことでは

何か相談がある、と書いて来ているんだね」

と、お祖母さんは、何か不安らしい目をして、じろじろと手紙に目をやった。

「そうらしく思われます。ごらんになりたけりや、ごらんくだすってもいいんです」

俊亮は、しぶい顔をしながら、正木からの手紙をぬき取って、お祖母さんのほうにつき出した。

「べつに、わたしが見なけりやならん、ということもないのだけれど……」

お祖母さんは、そう言いながらも、手紙をひろげて、念入りに読み出した。しかし「（さいさい）委細は拝眉の上」とあるきりで、はっきりしたことは何も書いてなかった。ただ「次郎のゆくすえとも、自然関係ある（うんぬん）儀につき、云々」という文句だけが、強くお祖母さんの目を刺激した。

俊亮は、お祖母さんにかまわず立ち上がった。